

2020年度 学校評価総括表 伊丹市立鴻池小学校

教育目標		ひとみ輝き 笑顔あふれる 鴻池小学校									
重点目標		○児童・保護者・地域に愛され信頼される学校					○協働体制を築き変革を遂げる教師				
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	教	保	児	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価	
基礎基本の徹底と授業改善 ①	・基礎的、基本的な知識・技能を習得する ・授業力の向上に向けて校内研究会を実施する	・授業数の補充：3年対象（金曜日の6校時）	・年間12時間以上の実施	※	※	※	A	3年生の時数については確保することができた。4・5月の休業期間中の時数確保のため、他学年についてもモジュール学習を取り組むなどの取り組みを行った。	・来年度は休業の予定はないため、年度当初から時数確保に努めていく。	・家庭学習の習慣づくりは親の役割が大きい。毎日机の前に座る時間を親も一緒につくることも低学年などは大切である。 ・「家庭学習習慣作りを」学校とPTAが連携して行っていくことも大切である。 ・課題設定やめあて、ふり返りを大切に授業に取り組むことで授業力の向上に努めることが大切である。 ・引き続き朝学習の継続が大切である。その上で、予習を宿題に取り入れられたり、授業の前に短い時間を利用したりして読解力や思考力を高める工夫をすることが大切である。	
		・家庭学習の目標時間（低30分中60分 高60分以上）とし、実現できるよう、学習計画の立て方指導する。家庭との連携を図り、宿題の内容の充実（達成率の向上、自主学習の工夫）をめざす。	・家庭学習の目標時間を達成する（低30分 中60分 高60分以上）及び宿題内容の充実	88%	82%	62%		8割強の児童が家庭学習の習慣づいている。ただし、高学年は、目標とする家庭学習に取り組んでいる児童が6割にとどまっていることが課題である。また、自ら課題を考えたり、探究したりする等の自主学習への取り組みについても検討が必要である。	・今年度に引き続き、家庭学習の習慣化を図りつつ、その意味（目的）や、学習時間（量）、学習内容（質）について児童、教師共に意識を高めていく。		
		・算数・国語の基礎基本の力をつけるため、朝学習を実施する。前年度の児童の学習分析を参考にした授業の復習プリントを活用する。	・基礎学力の向上	95%	※	※		各学年が計画的に朝学習に取り組んでおり、国語・算数の基礎基本の力の定着を図ることができた。また、取り組み内容についても、学年で検討し、実行することができた。	・児童が朝学習や授業等で学び得た基礎学力が定着しているかPDCAサイクルを行い、そこから児童の課題を発見し、その改善を目指した授業づくりに学校全体で取り組む。		
		・校内授業研究を年4回、公開授業を行い、教師の自主研修も定期的に行う。	・研究テーマを目指し、共通実践に重点をおいた授業の公開	※	※	※		コロナ禍においても、感染対策を考えながら、年4回の授業研究会を行うことができた。講師からの助言により、授業改善に生かすことができた。休校期間があり、クロスカリキュラム作りは難しかった。	・年間の見直しを持ち、クロスカリキュラム作りをしていく。できれば、学期ごとに重点的に取り組む単元が計画できるように考えていく。		
学力の向上 ②	・読書活動を充実させ、語彙力の獲得を図る	・全学年で、家庭とも連携を図り、読書の場を学校だけでなく、家庭読書の時間の確保も目指す。	・子どもに見通しを持たせるため、1ヶ月の読書数を目指す。低8冊、中6冊、高4冊（1週間に低2冊 中1.5冊 高1冊）	90%	52%	62%	B	委員会活動の取り組みや、教師からの推薦する図書を発信するなどして、本の紹介を行った。しかし、今年度は、全児童にひとり2冊の貸し出しができず、また持ち帰ることもできなかった。家庭における読書の環境は、差があり読書時間の確保は難しかった。	・学校から読書活動の啓発をしていくために、図書日より更に充実させていく。 ・児童が、興味を示す本を図書館に置くように市立の図書館とも連携を図り、蔵書内容を工夫していく。 ・市立図書館のように、できるだけ毎月新刊が入るように工夫する。また、新刊は、図書日より掲示して児童に紹介する。	・学校の取り組みだけではなく、家庭で親が活字を読む姿を子どもに見せることも一つの方法である。 ・読書が苦手の児童でもチャレンジしたくなるような企画や保護者も巻き込んだ企画が必要である。	
		・本に親しむ時間を可能な限り、設けるようにする。読書指導員との連携をはかる。	・図書時間割の作成読み聞かせ・委員会活動を通しての読書推進活動（校内放送の利用も視野に入れる）	91%	※	※		今年度は、図書館の使用に制限があり、例年のようにはいかなかったが、各学年・学級にブックラックなどを利用して本を貸し出すようにした。また、業間に貸し出しをおこなった。その結果、低学年や本が好きな児童は、目標の読書数に近づくことができたが全児童には広がらない。	・来年度も図書館の制限が必要な状況であるかもしれないが、ひとりあたり2冊の貸し出し冊数は、確保する。 ・教育課程とも連携を取り、朝読書の時間を確保する。 ・学級図書が充実するよう入れ替えなどを積極的に行うようにする。		
個に応じた教育 ③	・児童の実態を掴む ・支援体制の確立 ・特別支援学級の児童理解 ・特別支援学校との交流	・年2回以上各クラスの実態や学級経営について交流する。（人権特支研学会）	・年2回以上の交流の機会の設定	92%	※	※	A	年2回の研修会で、配慮が必要な児童と、その支援方法を共有することができた。またコロナ禍の学級経営で配慮すること、児童との関わりで気をつけることも交流することができた。今後も必要な課題を見つけて職員で共通理解することを継続して取り組んでいきたい。	・情報交換したことがそのときだけで終わらないよう部会などで話したことは各学年におろし、教職員全体で子どもたちを見ていく意識を高める。	・支援を必要とする児童に対する理解を深めるとともに、支援を必要とする児童への対応スキルを高めることは大切なことである。 ・支援学級の児童数が増加しているが、一人ひとりの児童理解を深め、一人ひとりに合ったきめ細かい支援が必要である。	
		・特別支援教育支援員との連携体制 ・巡回相談など専門家チームとの連携	・支援員と児童や授業についての情報交換	100%	※	※		本年度から支援員ファイルを作成し、情報交換を密に行うことで、支援員⇄担任⇄コーディネーターの連携がスムーズにできた。また、必要に応じて教育相談や巡回相談などにつなげることができた。	・来年度以降も支援員ファイルを継続して活用し、児童についての情報交換を行う。		
		・特別支援学級の児童理解のため、年1回以上の情報交換	・情報交換会の実施（年1回以上）	92%	※	※	年度当初に支援学級在籍児童の実態把握の研修会を行った。また、随時、各担任と情報交換を行っている。在籍児童の増加で、全体を把握するのが難しくなっている。	・部会等で情報交換された内容については、学年会等で共有する。 ・夏期研修等で、児童についての情報交換の機会を増やしていく。			
		・伊丹特別支援学校との学校間交流と校区交流（本年度は手紙交換など形を変えて行う）	・交流の計画、実施	※	※	※	学校間交流は行わなかったが、校区間交流は、各学年メッセージのやり取りを実施し、制限のある中、できる範囲での交流をすることができた。	・交流については、状況に合わせ、特別支援学校と相談しながら決めていく。			

No1

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った

豊かな心を育む教育の推進 ④	・生活指導月間目標の学校全体での共有及び実践推奨	・毎月、各教室と校内に掲示するとともに毎朝日直が朝の会の時に今月の目標を伝えるなど、日々の声かけで実践していく	・月間目標に対する児童への周知徹底と児童の意識を高める取り組みの実施	96%	※	49%	A	毎月、各教室と校内に生活目標を掲示した。また、朝の会の時間に日直が今月の目標を伝えることや、放送の活用、教職員が声かけ等を行うことで、学校全体で生活目標に対する意識を高め、児童への周知を図ることができた。しかし、児童の認識度が低いことから、さらに児童自身が意識を高めていく取り組みを実施していく必要がある。	・さまざまな方法で児童への周知は行っているが、児童の認知が半分以下であることと、廊下を走る児童がいるなど、引き続き粘り強く取り組んでいく必要がある。	・教室への掲示だけに終わらせることなく、子どもたちへ知らせ、どう取り組むのかクラスで考え意識を高める必要がある。
	・問題行動事案が起きた時の対応	・問題行動が起きた時、管理職・学年・生活指導への報・連・相を行う	・職員内の共通理解の徹底	96%	※	※		問題行動が起きた時、管理職・学年・生活指導への報・連・相が概ねできたので、問題が大きくなることは少なかった。	・今後も、引き続き報告・連絡・相談への取り組みを行い、協力体制を維持していく。	・クラブ活動は、異年齢交流できる良い機会である。子どもにとっても楽しみな時間なので回数を減らさずに継続していくことが大切である。
	・道徳の教科書と心シリーズ(副読本)の活用	・道徳の教科書・副読本を活用する	・長期休業や休日を利用し、保護者と共に通読する	95%	※	※		休校があったが、カリキュラムに沿った授業を行うことができた。また、道徳科の教科書・副読本を授業で活用することができた。長期休業前には、家庭に持って帰らせることができた。	・教科書、副読本は家庭に持って帰らせることはできたが、家庭で活用できたか、保護者と通読できたか等が不明瞭であった。形だけにらずに、啓発していく必要がある。	
	・人権参観、健康参観を実施する	・学年で指導案を作成・実施した後、課題について検討する ・使用した指導案や教材は残しておき次年度に活かす	・人権、健康教育の系統立てた指導の実施	※	※	※		今年度は、人権参観は中止になったが夏休み中に指導案の検討ができた。健康参観に関しても参観は実施できなかったが、系統立てた指導を行うことができた。	・今年度できなかった国際理解参観は来年度に実施する。学校や各学年やの実態に合わせて再度、指導案の見直しや工夫を行う。	
	・クラブ活動の実施	・異学年交流を通して、なかまづくりを考える。年間6回実施する(本年度は、2.3学期で4回)	・異学年との交流について学ぶ	92%	※	72%		今年度は、年4回と少ない中でも感染対策をしながら、楽しく活動できていた。また、自発的に異学年交流を行っている姿も見られた。	・引き続き自発的な交流ができるよう、活動内容やチーム分け等の工夫をする。	
豊かな心・健やかな体 食育推進 ⑤	・あいさつ運動	・委員会児童を中心とし、定期的にあいさつ運動を行う	・きもちのよい挨拶ができる児童を増やす	92%	94%	※	A	今年度から、下足室前のみであいさつ運動を行うことで、登校してきた児童に活動の意義が伝わりやすく、また、担当教員も指導につきやすくなった。自分からあいさつをする児童は、以前と変わりがないように思われた。	・現在のあいさつ運動を継続し、また、生活指導部との連携も行う。	・あいさつ運動の取り組みは成果があると実感する。「気持ちのよいあいさつ」への取り組みによって、お互いが「つながった」と感じる大切である。 ・先生方が来校者に対して気持ちのよいあいさつをされていることが子どもたちの良い手本となっている。
	・教材園で育てる体験の推奨	・系統的に学習とリンクさせ、草花や野菜の栽培活動を通して、計画的に利用する	・栽培活動の実践を通して、自然を愛する心情を育てる	94%	※	※		年間栽培計画に基づいて計画的・系統的に学習材が栽培されている状態を維持することができた。通年を通して季節の野菜を栽培することで、児童が積極的に栽培活動に取り組む姿が見られた。	・生活科や理科学習の内容に沿って、季節の草花や野菜の学年園の栽培年間計画を作成し、教職員に配布することで意識を高める啓発をする。	
	・給食センターとの連携	・ひとくちメモを給食開始時に広め、食について考える ・食育推進として講師を招聘し、食に対する意識を高める	・日々活用し、食に興味を持つ ・1年、2年で講師依頼(栄養士)し実施する(1年1回、2年3回)	82%	※	※		放送委員会に依頼し一口メモを放送してもらうことで食に興味を持つ機会を作ることができた。また、今年度は講師依頼をせず、栄養士が作成した資料を使い各担任が食育の指導を行った。	・継続して一口メモを活用してもらうよう啓発する。 ・食に対する意識を高められるよう、引き続き指導する。	
	・給食委員会活動	・残食を減らす呼びかけ、給食の片付け方などの呼びかけを行う	・残食を少しずつ減らし、きちんと片付けができるようになる	94%	※	84%		委員会活動の残食チェックの取り組みを通して、残食を減らす意識を持つことができた。ただし、今年度は片付けに関する呼びかけはできず、各担任による指導になった。	・委員会としてできる方法を考え、残食を減らす呼びかけや給食の片付け方の呼びかけをし、意識を持たせることにつなげる。	
健やかな体作り ⑥	・朝食の推奨	・朝食をとることを呼びかける	・朝食について保護者アンケートの実施(90%目標)	81%	97%	※	B	各家庭と連携し、高い成果を得ることができている。	・継続して、啓発に努める。	・休み時間に外で遊びたいような楽しいプログラムを企画する必要がある。 ・「週に何回かは外に出て遊ぼう」という先生の声かけや外遊び、例えば「大縄飛び」の目標を決めて取り組ませるなど、外に出るきっかけを作る必要がある。
	・業間休みの時間確保により、体作りの推奨	・体育部が主として行う、体力づくり推進企画(例)業間縄跳びなど	・児童アンケート「外で元気よく遊んでいる」で、90%以上を目標にする	82%	69%	41%		外遊びをする児童は多数見られたが、目標の90パーセントには到達していない。今年度は、委員会の企画や業間縄跳び等が実施できなかった。	・今の状況でできることを委員会や体育部で考えて、児童の外遊びにつなげていけるようにする。	

	・体育活動の全学年の系統化	・体育部を中心に、カリキュラムの系統化をはかる	・カリキュラム作成 各領域の達成目標を明確にし、次の学年へと積み上げていく	100%	※	※		今年度は変則的なカリキュラムだったが、各学年、今の状況でできる活動、やり方を考えて体育活動を行った。	・年間を通して指導する時間が確保できるので、各学年で達成目標を意識しながらどうしていく。
--	---------------	-------------------------	------------------------------------------	------	---	---	--	----------------------------------------------------	----------------------------------------------

No2

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った

開かれ信頼される学校園	情報開示 ⑦	・学校だより、学年だよりを月1回以上配布	・学校、学年だよりを発行する	・発行(年10回以上)	100%				発行することができた。	・今後も、継続していく。	・学校だよりやホームページは、コロナ禍で参観などが制限され、学校での子どもたちの様子を知ることができた。
		・学校HPを全学年月1回以上更新	・各学年、更新を行う	・更新(年11回以上)	96%	99%	※	A	休校期間中は学年単位でホームページを更新し、学校再開への準備の様子などを公開した。また、学校再開後はミニ運動会など行事や授業の様子を公開した。	・来年度も行事を中心にホームページの更新に努める。	
		・学校公開の実施	・行事や授業参観などで学校を開かれた場とする	・学校公開の実施(授業参観、懇談、など)	※				今年は、計画していた学校公開をほとんど行うことができなかった。	・来年度は、例年のように月1回以上の学校公開を実施する。	
	施設管理 ⑧	・活動しやすい環境の整備	・清掃活動を推奨する	・コロナ対策をした上での清掃活動ができたか	100%	※	84%	A	コロナ禍でこれまで通りの清掃をすることはできなかったが、感染対策をしながら清掃を行った。清掃の仕方が徹底できていない場所があったので、今後も周知していく必要がある。	・今後も継続して、感染対策をしながら工夫して清掃を行っていく。	・自分たちの学校を自分たちできれいに大切に使うという心を育てることが大切である。とも低学年などは大切である。
			・安全管理点検(月1回)を行う	・管理責任者による点検(カードに記載)	※	※	※		月に一度、安全管理点検を行うことができた。あがってきた箇所の補修も、すぐに対応できた。	・安全点検の際だけでなく、日頃から児童の安全に関わる部分は気をつけて見ておく。	
	安全管理 ⑨	・校区内の安全確保	・緊急時のパトロールMAPを活用する	・見直し、活用	96%	※	※	A	一斉下校訓練・時間差登校の際に、パトロールマップを活用して、校区内の安全確保に努めることができた。	・引き続きパトロールマップなどを活用し、校区内の安全確保に努める。	・登校時の見守りを繰り返す中で、放課後に遊んでいるときでも声をかける児童が多くなり、地域と子どもの関係づくりが進んでいる。 ・防災訓練や避難訓練を通して、自分の命は自分で守るということ、子どもたち一人ひとりに意識させることが大切である。
		・防災訓練、防犯訓練	・年間を通して、訓練を計画的に実施する	・計画、実施、反省	96%	※	88%		1学期は学級単位で、2・3学期は学校単位で訓練を実施した。(1学期・・・火災、2学期・・・不審者対応、3学期・・・震災)	・来年度も年間を通して計画を立て、実施していく。	
		・登校指導	・登校指導	・PTA、地域と連携をとって実施	96%	※	※		関係機関と連携をとりながら実施することができた。	・来年度も同様に、連携をとりながらパトロール、登校指導を行っていく。	

No3

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った

<p>学校関係者評価総括</p> <p>・当たり前と思っていた日常がどれだけ有り難いかを感じた一年であった。日常にあふれている「ありがたさ」に気づかされ、感謝することの大切さを改めて感じた。三密を避けながら手探りで創意工夫し、制限のある中で、できることを先生方が考えた一年であった。 ・子どものために何かやりたいという先生方の熱い思いや努力を感じることができた。「今、何ができるか」という前向きな考えで先生方の力が結集されたと感じた。</p>
<p>次年度に向けた重点的な改善点</p> <p>・学校・保護者・地域のとの連携と協力 ・「できた」「わかった」と実感できる授業改善 ・開かれた学校づくり ・一人ひとりの教育的ニーズに応じた特別支援教育 ・自己有用感を高める取り組み</p>

No4

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った